

老老センターで認知症を診る

函館市医師会
函館渡辺病院

三上 昭廣

1999年、アリセプトが「抗認知症剤」として初めて上市された頃から、認知症の「早期発見、早期治療」がテレビや新聞を賑わすようになってきました。時代に遅れまいと当院でも「物忘れ外来」を細々と始め、2012年には道から「認知症疾患医療センター」の指定を受けました。私が認知症診療に本気で向き合ったのは還暦を過ぎた頃でしたが、いつの間にか古希を迎え、立派な老人になってしまいました。「老老介護」が深刻な問題になっていますが、「老老センター」で認知症を診ることになったわけです。

医療一般にとって、「早期発見・早期治療」はきわめてまっとうな考えですが、それが「認知症」となると、首をかしげてしまいます。昔から、高齢者の認知機能低下は「耄碌」や「呆け」と言われ、加齢に伴う当たり前のこととして自然に受け入れられてきました。医学の専門用語では「痴呆」といわれてきましたが、それが高齢者に「侮蔑的」という理由から、「長谷川式簡易知能評価スケール」で有名な長谷川和夫先生の肝いりで、2005年「認知症」という立派な診断名に改訂されました。「認知症」という医学用語により、「侮蔑的」な響きは払拭されたかもしれませんが、製薬会社の社運をかけた販売戦略が功を奏し、「年を重ねると誰にもやってくる認知機能の低下」という自然な人間の有り様が、「手遅れになったら大変なことになる恐ろしい病気」と極端に「医療化」されたことは明らかです。嫌がる高齢の父・母をセンターに連れてきた子供たちは、あたかも癌の早期治療を求めるように、「認知症という恐ろしい病気」の早期発見・早期治療を求めて来るようになりました。

そもそも、抗認知症剤には脳病変の進行を抑制する作用はありませんから、高齢者にとって「早期発見・早期治療」にどれほどの利得があるのかははなはだ疑問です。それどころか、「認知症」と診断された途端に、誇り高く生き抜いてきた翁・媪への信頼や人としての評価が、「認知症だから」という理由で一気に切り下げられてしまうのですから、当人の情けなさは計り知れません。「認知症」という医学用語は、高齢者に対して「侮蔑的」ではなくなったかもしれませんが、「差別的」に使われていることは確かです。「早期発見・早期絶望」というアイロニーを深刻な問題提起として受け止めなければなりません。

少しくらい呆けても、人の手助けが必要になって

も、「認知症」などという診断と関わりなく、「年とって耄碌したじいちゃん・ばあちゃん」として、社会や家庭の中で最期を迎えるのが理想です。そうは言っても、核家族に「耄碌したじいちゃん・ばあちゃん」の介護を期待することは非現実的です。「老老介護」「おひとりさま」となった高齢者には、いつかは必ず介護サービスの手助けが必要となります。その際、どうしても「認知症」の診断がセンターに求められるのが辛いところです。

実は、5年前に深刻な病が見つかり、医師会の連中は「復帰はありえない」と噂し合ったそうです。ところが、「神に手」に巡り会えたのが僥倖でした。生還してから一日も休まず働いています。大病をすると「ものの見方が変わる」といわれますが、私もその例外ではありません。日々生きているのがありがたくて仕方がないのはもちろんですが、高齢の人を前にすると、「苦勞を乗り越えてこんなにも長く生きてきた」というだけで尊崇の念を抱かずにはられません。もっと正直に言うと、そんなに長生きできそうもない私は、私より遙かに長命な人が羨ましくて仕方がないのです。そんなわけで、私のセンターでは、必要な検査や診断を行い、その結果を丁寧に説明するのは当然ですが、それ以上に、これまでの80年、90年もの間、戦争をくぐり抜け、社会のために懸命に働き、家族を必死に守ってきた長い長い人生を「寿ぐ（ことほぐ）」ことを一番大切にしています。「こんなに長生きできて羨ましい限りです。物忘れは変な病気ではありません。長生きの証しのようなものですから、まだまだ元気に長生きできますよ」と言うと、それまで「恐るべき認知症」の宣言を前に緊張しきってきたご本人もご家族も表情が緩みます。検査結果は「疑いようのないアルツハイマー病」であることを説明したのに、ご本人も、ご家族も「診てもらって良かったね」と笑顔で診察室を出て行かれたとき、私はこの仕事をしている意義をしみじみと感じます。

先に触れた高齢者精神科医療の重鎮、長谷川和夫先生が、89歳になった昨年、ご自身が「嗜銀顆粒性認知症」であることを公表し、「不自由なところは人にお願ひし、腹をくくって一日一日を大切に、自分のできる範囲で人の役に立つことをやっていきたい」と話されています。加齢とともに誰にでもやってくる認知機能の低下を冷静に受け入れ、前向きに暮らしてしていく決意を、先生自身が語られた意義は極めて大きく、やはり長谷川先生は今も私ども認知症に携わる医者リーダーであることを改めて痛感しています。

毎日のように眼鏡を探しまわっている私に、妻に「大丈夫？」と真顔で言われると、老老センターでの認知症診療も「いつまでできるか」と考えてしまいます。